

再び厄魯特について

— ジュンガル王国勃興史の一側面 —

羽 田 明

【要約】 一七世紀の前半から一八世紀の中ごろまで、ほぼ一世紀半の間、西モンゴル族は騎馬民族として、いわば最後の目ざましい活動をした。彼らの国家は一般に「ジュンガル王国」の名で知られている。ただ、ジュンガル部は旧来の慣例に従って「四オイラット」とよばれつづけた西モンゴル族の一部族であっても、最初から西モンゴル族の支配部族だったわけではない。一六世紀の八〇年代ごろから一七世紀の半ば近くまで、ホシュート部の優越した一時期があったと考えられる。ホシュート部は東モンゴル系に属しながら、「四オイラット」のうちに数えられた一部族である。清朝で「四オイラット」と混同されるエルートはこのホシュート部の異称、より正確にはその最盛期の支配氏族の族称であろう。ホシュート部長がオイラット汗を称した時期のオイラット國家は「エルート王国」と呼ぶべきものと考ええる。

史林 五四巻四号 一九七一年七月

はしがき

史』一九二五や『近代蒙古史研究』一九二五の關係部分くらしいしかなかった。

「厄魯特考」(『東方学』一〇、一九五五)、「西套厄魯特の起源」(『神田博士還暦記念書誌学論叢』一九五七)などを発表して、

筆者が疑問の多いジュンガル王国の形成過程の問題に検討

を加えたのは、十数年も前のことであった。そのころ、類

るべき邦人学者の研究としては、矢野博士の『近代支那

とところが、そののちの十数年間にジュンガル王国、もしくはオイラット史の研究は大いに発達した。護雅夫氏の

「哈喇忽刺と巴圖爾渾台吉」(『和田博士還暦記念東洋史論叢』一

九五二)について、山口瑞鳳氏がチベット史料に拠って青海

ホシュート(和碩特)部の祖「顧実汗のチベット支配に至

る経過」(『岩井博士古稀記念典義論集』一九六三)を明かにした。

次いで新進の若松寛君は、ロシア史料・モンゴル史料を駆使して、ジュンガル王国の祖と伝えられながら疑問の人物だった「カラクラの生涯」(『東洋史研究』二二四、一九六四)を描き出し、ジュンガル王国史にとって極めて重要な「カラムックにおけるラマ教受容の歴史的側面」(『東洋史研究』二五一、一九六六)に光明を投げた。一方、ヨーロッパでは、ペリオの遺稿集の一冊として、P. Pelliot, *Notes critiques d'histoire Kalmoûke*, Paris, 1960 が公刊され、И. П. Зрачкова, *Memoria Dyngnarского Xanemua* (1635-1758), Москва, 1964 が出版された。一六三五年はカラクラの死後その長子のバートゥルが嗣立し、ホンタイジ(渾台吉)と称した年、一七五八年はジュンガル王国が滅亡した年である。若松君のその後の研究、「ツェワン・アラブタンの登場」(『史林』四八一六、一九六五)、「センゲ支配期のジュンガル汗国の内乱」(『遊牧社会史探求』四二・一九七〇)などは、同君が「ジュンガル王国の高度の通史」として推賞し、その内容を『東洋史研究』二五一一、一九六六に紹介しているズラートキン氏の著書に負うところが少なくない。このほか、岡田英

弘氏がオイラットの文学作品として有名な『ウバシ・ホンタイジ伝』の要約に考証を付し、一六世紀後半から一七世紀中葉までのモンゴル・オイラット関係を辿った「ウバシ・ホンタイジ伝考証」(『遊牧社会史探求』三二・一九六八)も見のがせない。『岩波講座世界歴史』一三、中世七、七三—一〇一頁に収められている若松君の「オイラット族の発展」は前記の内外の諸研究の成果を集めたもので、現在のわが国におけるジュンガル王国史研究の水準を知るに足る。これに較べれば、筆者が最近寓目した Paula G. Rubel, *The Kalmyk Mongols*, Indiana University, 1967 の第一章の「歴史的背景」は一九世紀的とさえいってもよい。もっとも、オイラット史、もしくはジュンガル王国勃興史にはなお疑問が少なくない。一九六三年以来筐底に蔵していた講演の草稿のうちから鶏肋なお棄てがたい部分を拾い大幅に補訂を加え、厄魯特考の続篇として敢て諸氏の批判を仰ぐゆえんである。

一九六三年の講演というのは、同年東洋文庫で行なった講演を指す。このときには、ジュンガル王国勃興史として一応の体裁を整えた。その梗概は一九六五年の秋、ハンブルグ大

学・ボン大学でも講じた。Urul-Altatische Jahrbücher, Band, 42 Heft 1-4, 1970 にガベン女史の斡旋で掲載された Histoire des Djoungnar aux 16^e et 17^e siècles はその仏訳草稿である。

一

元朝の崩壊後にわかに勃興し、一五世紀の前半、強酋エセン Ešen (也先) のときに頂点に達した西モンゴル族オイラット (瓦剌) の勢力は、その死 (一四五四) とともに急速に衰えたと考えられがちであった。しかし、それは中国側の史料にみえていないだけで、かならずしもそうでなかったことは和田清博士がつとに指摘されたところである。^①

一五世紀の末から一六世紀の初にかけて、ダヤン (達延) 汗のもとに東モンゴル族 (韃靼) の復興がなり、内部の統一はできたが、その勢力範囲は内モンゴリアだけで、外モンゴリアは依然としてオイラット族の拠るところであった。東方への進出を阻止されると、オイラット族はその活動を必然的に西方——東西トルキスタン・キプチャク草原方面——へ指向した。ことに、チャガタイ汗家の血統をひくモ

グーリスタン汗国が衰え、新興のカザフ族が盛んになった一六世紀の三〇年代からは、そのうち二世紀におよんだオイラット・カザフ両民族の抗争が始まった。^②

もっとも、内モンゴリアの統一に成功した東モンゴル族が何時までも祖宗の地である外モンゴリアを西モンゴル族の手に委ねておくはずはなかった。『蒙古源流』巻六に依ると、一五五二年、アルタン (俺答) 汗は親ら兵をひきいてドゥルベン・オイラット (四衛拉特) を攻め、クンゲイ Kunggei (控奎) ・ジャブカン Jabqan (札不罕) の付近で、八千ホイット、すなわちナイマン・ミンガン・ホイット Naiman minggan Qoit (奈曼明安輝特) のノヤン (諾延) マニ・ミンガトツ Mani Mingatu (瑪尼明阿圖) を殺し、その妻と二子および全部衆を降し、久しくオイラットの手に没していた和寧すなわちカラコルム Qaraqorum (和林) を奪還したという。クンゲイ・ジャブカンは西北モンゴリアのアヤル・ノール Ayar-nor に注ぐ両河の名である。東モンゴル族に属するハルハ (喀爾喀) 部の勢力がハンガイ (杭愛) 山あたりまで伸びたのはこの征伐以来のことであった。

次いで一五五七年には再びオイラットを伐ち、一五五九—一六〇年には青海を征服した。オイラット征伐の委細は判らないが、青海の征服は徹底的であった。これよりさき、ダヤン汗に伐たれたエセンの孫イブラヒム・Ibrahim (亦不剌) は逃れて本来チベット族の住地である青海に拠り、やがて勢を回復したので、ダヤン汗の孫に当るオルドスのギユン・ビリック・メルゲン Gun Bilik Mergen (衰必里克墨爾根) は、一五五三年、これを伐って潰滅的な打撃を与えた。ところが、イブラヒムの余党がそののちまた青海に拠ったので、アルタン汗は遠征して青海全土をその手に収めた。イブラヒムの竄入によってはじめてモンゴル族の移住をみた青海は、ここに至ってモンゴル族の支配下にはいったのである。

一方、一五六二年には、アルタン汗の従孫のフトクタイ・セチェン・ホンタイジ Qutuktai Sečen Gongtaiji (庫圖克台徹辰鴻台吉) がイルティシユ河畔にトルグート Torghut (土爾扈特) を伐って勝利を収め、東モンゴル族の勢力をはじめアルタイ山脈を越えた。

アルタン汗が明と講和した一五七一年以後、東モンゴル

族の西方拓疆はいっそう活発になった。一五七二年のカザーフ族征伐は失敗したが、翌七三年、フトクタイ・セチェン・ホンタイジは復仇の師を興して、大勝を得た。この間、オルドスのブヤン・バートゥル・ホンタイジ Buyan Batur Gongtaiji (布延巴圖爾洪台吉) らは西北に進んでドゥルベシ・オイラットの本拠に侵入した。カザーフ族遠征からの凱旋途上にあつたフトクタイ・セチェン・ホンタイジはこの報をえると、急に輜重をバルス・コル Bars Köl すなわちバルクル Barkul (巴里坤) に留め、オイラット征伐に加わった。ブヤンは、ハルガイの Garghai (哈爾孩) すなわち杭愛山陽で、元代のオイラット王家直系のエセルベイ・キヤ Eshelbei Kiy-a (額色勒貝侍衛) のひきいる八千ホイット万户 Naiman minggan Qoit tumet (nr) をごとごとく降した。一方、フトクタイはジャラマン・ハン Jalaman-Qan (濟拉瑪罕) 山陰の地でバートゥット Baghatut, Bartut (巴圖特) を降した。また、フトクタイの子オルジエイ・イルドゥッチ Oljei Ilduci (鄂勒哲伊勒都齊) は、三カ月の間、敵を追撃し、タンス・ウリヤンハイ (唐努烏梁海) のトゥバハン・ハン Tubagan Qan (圖巴罕汗) 山陽でチ

ロス *Coros* (緯羅斯) のデルベツト (杜爾伯特) ・オトツクを破った。帰途フトックタイはブルンギル (博羅吉爾) からブヤンに使者を送って、ホイット万戸の解体を勧めたが、ブヤンは同意せず、叛いた捕囚のエセルベイ・キヤに殺されたという。フトックタイが凱旋したのは一五七四年のことだったらしい。

和田博士の研究に岡田氏の「考釈」を加えてアルタン汗時代のオイラット征伐の経過を述べるとおおよそ以上のおりで、アルタイ山脈の東西の地方に拠っていた一六世紀末期のいわゆる四オイラット——ホイット・バートツット、トルグート、チヨロス——諸部族の分布を知ることができると。ホイットはさぎにみたように、元代のオイラット王家の直系の部落、チヨロスはエセンの子孫の部落として知られ、いずれも本来のオイラット (斡亦剌惕) 族である。これに反して、トルグートは元代のケレイト *Kereit* (客喇亦惕) の末裔である。バートツットについては何も判らないが、その住地からすれば、やはり本来のオイラットではなかつたのではないか。ウラジミルツォフに従えば、チンギス汗時代以来の四 (万) オイラット *Dorben tümen Orhat*

の族称は残っていても、明末清初のころには、それはその時々で変化する四部族の同盟と考えられるまでに変質していたといわれる。このことは、四オイラットといいつながら、実際にはそれ以上に多くの部族を数えている事例からも証明できる。^⑦アルタン汗の征伐のころから、本来は東モンゴル族に属するはずのホシュート *Qosint* (和碩特) 部がいわゆるオイラット同盟に加わったらしいことはのちにみるとおりである。

最後に和田、岡田両氏が未解決のままに残しているバートツットの住地のジャラマン・ハン *Jalaman-qan* (滿文では *Jilama-han* 濟拉瑪罕はその音訳) について一言しておこう。この山の名が隋唐時代に哈密の北山、すなわち現在のカルリック・タীগ *Qarlıqtagh* を指したと考えられる時羅漫・折羅漫・折羅漫・初羅漫などのそれに酷似していることは何人にも異論がなからう。『大明一統志』卷八十九、哈密山川の条に

天山。在哈密城北。一名雪山。番名折羅漫山。

とみえているのも、両者を同一とみなした結果にちがいない。番名折羅漫山というのは、あるいは当時の中国人がモ

ンゴル語の呼称を知っていた証拠とも受取れる。ただ、彼らの伝統的な修史法から判断すれば、実際には拆は古書にみえる折・折などの誤字もしくは類音異字にすぎないであろう。そのころ、現地のトルコ系住民がすでにカルリック・ターグと呼び慣わしていたことは雪山の名称から推定できる。トルコ語でカルは雪、ターグは山を意味し、カルリック・ターグとは正に「(年中) 雪のある山」すなわち雪山にはかならないからである。

字音の類似以外にも、ジャラマン・ハンをカルリック・ターグに比定するに足る根拠がないわけではない。

時羅漫山の名は、内乱に敗れた西突厥の処羅可汗が一時その部属をひきいて高昌に逃れ、さらにその東方のこの山の付近に拠った事件に関連して『隋書』にみえるのが最初である。ところが、和田博士の研究によれば、唐代から明の中葉まで、より詳しくいえばモンゴル族の西方発展まで、「哈密の北山、今のカルリック・ターグ、トゥル・クル Tur-kuil の方面」には引続いてメクリン(Mekrin) 、ベクリン Bekrin (セ克力) などとよばれるトルコ系? の一部族が拠っていた。ダマン汗の出現に先立つ東モンゴル族

の内乱時代にオルドスに拠った進北の大酋札思闐 Beko-
Istan 『源流』巻五の伯格呼遜は滿文 Begeresim の音訳) やその族弟の亦思馬因 Ismail (同伊斯滿) などは『源流』にはオイラット(衛拉特) となっているが、実はメクリン出身者であったという。このような著しい事実を明らかにされた和田博士は「思うに天山の東北端、所謂哈密の北山の地方は、北方の遊牧民族と南方の城郭国(オアシス国家群)との界線上に当たっていたばかりでなく、同時に東方の蒙古及び支那の勢力の容易に及び得る最西端で、ある意味に於ては、また東西勢力の界線にも当って居った。その十字界上の無所屬地帯は偶々險峻な地形と相俟って、古来特殊の勢力の独立を許したものであろう」と結論されている。バートウットの正体は不明だが、すでにいったように、さまざまな系統の部族を含んでいたいわゆる四オイラットの一部がここに拠っていたのは極めてあり得ることではあるまいか。

右の推定を支持するのは、『源流』巻六にみえる一五七三—一七四の征伐の記事そのものである。先きにも引用したように、チュー・タラス両河方面のカザーフ族に対する報

復戦に勝って凱旋途上にあつたフトックタイ・セチエン・
ホンタイジは輜重をバルクルに留めて、ブヤンらのオイラ
ット征伐に加わり、ジャラマン・ハン山陰でバートウツ
を降したと伝えられている。ジャラマン・ハンはバルクル
東方のカルリック・タীগと考えてまず間違ひあるまい。

- ① 和田清「明代の蒙古と満州」(『東亜史論叢』二九四・二九三・二九二頁等)。
- ② 若松寛「オイラット族の發展」七五—七六頁。
- ③ ナットマン 訳本 I. J. Schmidt, *Geschichte der Ost-Mongolen*, St. Petersburg, 1829 (二二七頁)・江東訳本「一九四〇(二二七頁)は、いずれも漢訳本と同様に「チョロスの四オトック」と訳している。ただ、*dörben otog* はジエンガル部と同じチヨロス姓でその同族といわれるチルベット *Dörbet otog* を指したものと解した方が判り易いので、岡田氏の「考釈」一〇頁に従った。
- ④ 和田清前掲「明代の蒙古と満州」のほか、「俺答汗の霸業」(『明末清初に於ける蒙古族の西征』(『東亜史研究』蒙古篇。一九五九、七七—七八九頁、八七九—八八八頁))
- ⑤ P. Palliot, *Notes*, pp. 30-33.
- ⑥ ウラヂーミルツォフ・外部省調査部訳『蒙古社会制度史』一九三六—二七六—七頁。
- ⑦ 一六二三年、カラムツクの住地に使したロシアの使節 *Vasilii Volkov* の報告には、ホシュート、ジュンガル、トルグート、バートウツ、ホイットなどの部族名が列挙されていて、『源流』や清代諸史料にみえる四部と違つて、*H. H. Ilacrina, Mapa Yraku* にも四オイトの「六姓」がみえる。若松寛「カラクラの生涯」註一七、二八—二九頁参照。

⑧ E. Chavannes 著・馮承鈞訳『西突厥史料』上海、一九三四、一八頁。

⑨ 和田清「七克力考」(『東亜史研究』蒙古篇、八五五—八六五頁)、同「兀良哈三衛に関する研究」(前掲書、三八八—三九九頁)

二

一六世紀の後半、東モンゴル族がしきりに西モンゴル族
オイラットを伐ち、その結果として右翼のハルハ(喀爾喀)
諸部の勢力が西北に伸びてくると、オイラットは必然にそ
の圧迫を受けた。岡田氏によれば、アルタン汗の征伐後
まだ間もないころから、ハルハのアバダイ・ハン *Abadai*
Qan はざかにオイラットを伐ち、一五八〇年代にはジ
ャブガン川の南、アルタイ北方のコブコル・ケリエ *Kob-
ker Keriy-e* へ大いにエルート *Öldt* へ *Ogelet* (厄魯特)
を破り、ハナイ・ノヤン・ホンゴル *Qanai noyan Gong-
shor* (哈尼諾顔洪果爾) を殺し、その子 *Shubday* *Subbai*
をオイラット汗にしたが、アバダイ・ハンが死ぬと、*Shu-
bday* はたちまちオイラットに殺された。ころは一五九〇
年代のことであった。アバダイ・ハンは『蒙古遊牧記』卷
七、外蒙古喀爾喀汗阿林盟遊牧所在・土謝圖汗部の条にみ

えるハルハ四部の祖格琦森札の孫の阿巴岱汗にちがいないが、シユブダイについては何の記載もない。

ところで、清朝側の史料ではハナイ・ノヤン・ホンゴルはチンギス汗の末弟ハブト・ハサル(哈布图哈萨爾)の十八世の孫に当るホシュート部の長で、その祖父ボベイ・ミルザ Böbei Mirza (博貝密爾咱)がはじめてオイラット・ハン(衛拉特汗)と称し、ハナイがこれを継いだと伝えられている。^③モンゴル史料に拠ってアバダイ・ハンのオイラット征伐の始末を説いた岡田氏は、右の清朝側の所伝と考合せた結果として、これをホシュート部の存在が確認できる最初の事件とし、ボベイ・ミルザがはじめてオイラット汗と称した年代を逆算すると、「丁度嘉靖三十一年(一五五二)のアルタン・ハンのホイット征服のころである。恐らくホイットの衰微に乗じてホシュートが興り、オイラットの指導権を握ったのであらう」と想像している。東モンゴル族のコルチン Khorčin (科爾沁)部などと同系統のホシュート部がアルタン汗のオイラット征伐のさいにどのような行動を取ったかはまったく不明であるが、現存の史料からする限り、無理のない推定であらう。

アバダイ汗に代ってオイラット征伐を続行したのはジャサクトツク Jасагу (札薩克圖) 汗家の祖ライコル Laygor (賽瑚爾) 汗で、一六〇六年には、タルバガタイに近いエミル Emil 河口のシャラ・ホルスン Sara Qorsum で四オイラットと講和し、その結果、オイラット諸部はライコル汗の宗主権を承認し、部分的にせよ納貢の義務を負うことになった。^④このライコル汗の従弟で極辺のウプサノール Upanor 湖付近に幕営を構え、和託輝特の部長として烏梁海 Uriyanggai 人からも貢賦を収めていたシヨロイ・ウバシ・ホнтаイジ Soloi Ubashi Gongfajii (碩墨烏巴什渾台吉) という人物があった。『ウバシ・ホнтаイジ伝』の主人公で、初代のいわゆるアルティン汗 Altin Qan、ロシア人のいう Alтын tsar である。和託輝特は恐らくモンゴル語で「後方の」「北方の」などを意味する qotın をホイットに冠した形で、タンス・トゥバ地方に追いつめられたホイット族の一部が森林の民であるウリヤンハイ人などとともアルティン汗の所部を構成していたのであらう。^⑤

ウバシ・ホнтаイジがシャラ・ホルスンの和約を破って、

オイラット攻撃を再開したのは一六一七年のことだったらしい。そのころ、ジュンガル部長カラクラ (Qaraqula) (ハラクラ (Kharakhula)) はイルティシュ川上流右岸の地に住牧していた。カルムツクの伝承にもとづいたペルラスの書に依れば、狩猟のさいに殺した「大山猫」(トルコ語で qara-qulaq) に因んで「カラクラ (哈喇忽喇) と仇名された^⑥ フトツガイトゥツ Qutughaitu (呼達該図) はカルムツク族を東モンゴル族のハンに対する服従・貢納の義務から解放した首長たちの一人であったといわれ、ロシア側の史料もこれを裏書きしている。^⑦ 事実、カラクラは、一六二〇年には、四千の兵をひきいてウブサ・ノール湖畔のウバシ・ホントイジの本営を攻めて勝利をえた。しかし、ウバシ・ホントイジ軍の追撃に会って惨敗し、辛くもロシア領に属するオビ川支流のチュムシユ Tyumshiu 川の河口に逃れた。一六一六年以来、父から別れてイルティシュ川流域のロシア国境に近いヤミシユ Yamish 塩湖周辺に住牧していたその長子のバートル・タイジ Batur taiji (巴圖爾台吉) ——一六一六年のロシアの使節がカルムツク最大のタイシヤ taysya というボガティリ Boratyrly ——が直接この戦

に参加した証拠はない。ただ、一六二〇年に、バートルがロシアの許可をえてシベリアに移り、東北のイシム川の流域地方に拠った事実が知られている。^⑧

イルティシュ川の流域一帯は、こうして、アルティン汗ウバシ・ホントイジの有に帰した。しかし、『ウバシ・ホントイジ伝』によれば、ホイット、ジュンガル、トルグート、ホシユートなどのオイラット諸部族は連合して失地回復を計り、一五二三年、ウリヤハイ人一万五千を含め、八万と号する大軍をひきいて西征したウバシ・ホントイジとさきのシャラ・ホルスンからほど遠からぬ地点で激しく戦った。そうして、ペルラスは「カラクラは再度モンゴルに潰走させられた」といつているにも拘らず、岡田氏の考証^⑨に従えば、オイラット軍が勝ち、ウバシ・ホントイジは戦死したのが真相らしい。『ウバシ・ホイタイジ伝』には、ウリヤンハイの首長がウバシ・ホントイジの無思慮に愛想をつかし、戦闘開始に先立って陣營を離れたことが伝えられている。

アルティン汗との戦いにおけるカラクラ、バートル父子、とくにカラクラの行動をやや具体的に跡づけることが

できるのはロシア史料のお蔭で、その限りでは彼の果した役割は指導的であったようにみえる。ただ、『ウバシ・ホンタイジ伝』によれば、ウバシ・ホンタイジを迎え撃ったオイラット族の首長たちのうちで、ホトゴイットのエセルベイン・サイン・キャ Eselbeyin Sayin Kiya のひきいる四千人、ジュンガルのホトゴイット・カラクラ Otoghojitu Qaraqula の六千人、トルグートのサイン・テメネ・バートル Sayin temene Batur の八千人などにくらべると、ハナイ・ノヤン・ホンゴルの第二子で、その後をついだバイバガス Baibaghas (拜巴噶斯) 汗は一万六千人の兵を擁したというだけで、圧倒的にその兵数が多い。のみならず、ゴムボエフ訳本には、バイバガスがオイラットの政・教両面を統べたとみえている。^⑩ ここにいう宗教とは、このころから急速にオイラット族の間に広まりつつあった黄帽派のラマ教であり、その興隆にもっとも功があったとして名高い高僧ザヤ・パンディタ Zaya Pandita は一六一五年にバイバガス自身に代って出家したその族子であった。この間の事情をより詳しく伝えたホシュート部王侯のバートル・ウバシ・テュメン Batur Ubaši Tumen の『四オイ

ラットの物語』などには、内外モンゴリアで名声の高かった活仏チャガンノムンハン Čaghan Nomun Gan がバイバガス汗を訪れたとき、汗はこれに帰依して自から出家する意志を表明したが、オイラットの王侯・大臣らは「われらはあなたから離れたら、われらの土地・牧地を維持することは困難である」といって反対し、チャガンノムンハンの勧めに従って、諸部の首長たちはそれぞれ一子をラマとした。しかし、ラマとすべき実子のなかったバイバガスは族子で当時十六歳のザヤ・パンディタを出家させたことになつてゐる。^⑪ 政治的・宗教的にバイバガス汗擁護の性格が強いと考えられる伝承をそのまま鵜呑みするわけにはいかないであろう。さりとてロシア側の史料にバイバガス汗のことがみえないからといって、カラクラの勢力を過大に評価することも適當ではあるまい。

ズラートキンはこの矛盾を解くために、バイバガス汗は一六四〇年に没した。このころまで、オイラット族は二人の「集会」Čuġhan の指導者によって支配されていた。一人は本来「集会の長 darġa」であるべきホシュートのバイバガス汗、もう一人はアルティン汗との戦を指導したジ

ユンガルのカラクラであった。彼らの死後はそれぞれの子であるオチルトツ・ツェツェン・ハン Očirtur Tsetsen Qan (鄂齊爾圖車臣汗) とバートツル・ホンタイジとが彼らの地位をついだ。このころにはオイラット族の国会に当る「集会」はすでにその機能を失なっていた。なぜならば、カラクラ、バートツル父子、特にバートツルは次第に勢力を強化し、事実上のジュンガル汗国の最高権力者となりつつあったからだと説明している。果してそうであったかどうかについては、のちに改めて考えてみたい。ただ、カラクラ、バートツル父子の時代にジュンガル部の名がようやく有名になったことだけは認めないわけにはいかない。ジュンガルはモンゴル語で Jəgün ghar 「左の手」を意味し、もともとオイラットの「左翼」の子孫であったらしい。

- ① 岡田「ウバシ・ホンタイジ伝考釈」二〇—二頁。
- ② 『皇朝藩部要略』巻八
- ③ 註①参照。
- ④ 若松「オイラット族の発展」二七頁。
- ⑤ ウラヂーミツォフ著・外務省調査部訳『蒙古社会制度史』一九三六、三—七頁。
- ⑥ P. Pelliot, *Notes critiques*, p. 24.
- ⑦ 若松「カラクラの生涯」

⑧ 同前。欽定外藩蒙古回部王公表伝卷之六十三、伝第四十七にみえるところは左の如し。和托輝特為喀爾喀極辺。西近厄魯特。北近俄羅斯。俗喜闊。烏梁海復錯処其間。捕貂射狐。依木而居。納賦和扎(託?)輝特。有事則籍之為兵。故和託輝特雖隸扎薩克圖汗。實自為一部。

⑨ 岡田「ウバシ・ホンタイジ伝考釈」一三—一四頁。

⑩ Лалсан Гомбоен, *История Улан-хунмудэжур нево войны с Ойратами* (текст и перевод), Труды ВОРПО, 4, VI, сн 6, 1858, стр 204

⑪ 若松「カルムックにおけるラマ教受容の歴史的側面」九九—一〇〇頁。

⑫ И. Я. Златкин, *История Джунгарского Ханства*, стр. 122

三

ウバシ・ホンタイジの侵入軍を粉碎し、旧牧地に復帰した四オイラットでは、やがて内乱が起った。カラクラの諸子の一人が死んだあと、その遺産の相続をめぐって兄弟が相争い、カラクラ、バートツル父子はもとより、複雑な血縁関係・利害関係で結ばれていたその他の諸部族もその渦中に捲きこまれたのである。①一六二五年から二九年まで続いたこの内乱の経過を正確に跡づけることは難かしいが、その間に諸部族の勢力に隆替があり、四オイラットの再編成が進んだことは確かである。例えば、かつて優勢だった

ホイットは勢力を失ない、バートウット、バルグ Barghun (ブリアット Buriat) などは部族集団としての存在を失なつたが、一九二八年までバートゥルと行動を共にしていたトルグート部長のホ・オルリュック Xo-orluk (和鄂爾勒克) が多数の部族民をひきいて西方へ移動し、一六三〇年ころ、エティル 口三 (額濟勒) 川、すなわちヴォルガ川の流域に辿りつき、ここに住牧したのも、この内乱の結果らしい。祁韻士の『皇朝藩部要略』卷之九、「厄魯特要略」一には、「トルグート部長のホ・オルリュックはジュンガルのバートゥルと仲たがひした結果、ロシアのヴォルガ川に徙牧した」といつている。四オイラットの再編成の過程で、ジュンガル部、とくにバートゥルの勢力が強化されたことを想像させる。前後五年におよんだこの混乱期に、第二代のアルテイン汗 オンブ・エルデニ Onbu Erdeni (俄木布額爾德尼) が四オイラットに対して復仇の師を興そうとせず、一六二九年、かえつてバートゥルと和睦したのは、清朝の攻撃を受けた内モンゴリアのチャハール (察哈爾) 部の諸酋が外モンゴリアに逃れ、ハルハ諸部の内部で紛争がおきたためであつた^③。

一六三四年にカラクラが死ぬと、バートゥルがそのあとをついでジュンガル部長となつた。バートゥルは襲位後ただちにカザーフ族の住地に出兵し、その汗の一子を描える成功を収めたと伝えられるが、ハナイ・ノヤン・ホンゴルの五子、いわゆる「五虎」tabun bar の一人であるホシュート部のグシ (顧実) 汗が移つて青海に拠つたのも同じころのことであつた。矢野博士は『近代支那史』六六一六七頁で、十七世紀の前半における四オイラット族の分離運動に触れ、次のように論じておられる。

「トルグート部はホ・オルリュクにひきいられてロシアのヴォルガ河辺に移り、ホシュートはグシ汗にひきいられて大部分青海に移り、一部分はグシ汗の兄のバイバガスにひきいられて甘肅北塞外西套地方に占拠し、ジュンガル、デルベットの二部のみがアルタイ・天山間の旧牧地に留まることがとなつた。もっとも、ホシュート、トルグートのうちでも留まつたものもあつたが、それは一部分で、そういうものはジュンガル、デルベツト二部の間に付牧していたのである。トルグートの移つたのはジュンガルのバートゥル・ホンタイジが強をたのんでオイラット諸部を凌轢した

ため、これを避けたことになっているが、ホシュートの移ったのもそのためであったかどうか。シナの記録にはホシュートのグシ汗がもっとも強く、四オイラットの首であったとみえ、もっとも強いものが旧牧地を棄てて青海に移ったということは如何であろう。青海に移ってから強くなり、青海がシナに近いので交渉を生じ、もっとも強く、四オイラットの首であると称し、それが信じられるに至ったのであるまいか。ロシアの記録にはバートゥルの弟のシユクルあるいはチヨクル・ウバシ(楚琥爾烏巴什)、トルグート(鄂)のホーウルリユク、ホシュートのオチルトツ Öçirtu (鄂齊爾圖、バイバガスの長子)、アブライ Adlai (阿巴頼諾顔、バイバガスの次子)、クンドゥル・ウバシ Kundulen udasi (昆都倫烏巴什、グシ汗の兄)、デルベットのダライ Dalai (達賴)などがカルムックのタイシヤ(台吉)としてあらわれているが、バートゥルはひとりコンタイシヤ(ホンタイジ)として、諸タイシヤ中最大の権力者であったようになっている。グシ汗はシナに近い青海地方でもっとも強かったかも知れないが、ロシアに近いアルタイ・天山間ではバートゥルはもっとも強かったようである」。

バイバガスの西套占拠が『親征平定朔漠方略』卷之一、康熙十六年六月丁未の条の注の誤伝に由来する誤解であることは、かつて「西套厄魯特の起源」で詳しく論証したとおりで、バイバガスはもちろん、オチルトツ、アブライの両子もついにアルタイ・天山の間、いわゆるジュンガリアの地から離れたことはなかった。

ところで、グシ汗の青海移牧については、チベット史料、とくに『青海年代記』^⑤に大要次のようにみえている。すなわち、ハルハの内乱のさいに、紅教の熱心な信者であったチヨクトツ・タイジ Čoqtu-taiji (綽克圖台吉) は国から追われて、一六三四年、当時まだ清朝の勢力のおよんでいなかった青海にはいり、アルタン汗以来黄教の信者であったこの地方のモンゴル族を討ち、チベットに侵入した。そこで、第五世ダライ・ラマは、この黄教の危機を救うために、四オイラットに救援の使を送ったから、グシ汗は一六三五年、和解を計るために巡礼者を装って入藏したが、翌三六年にはバートゥル・タイジを伴って、イリ、タリム川を過ぎ、秋冬の候にツアイダム(阿爾泰)の湿地を横切り、翌一六三七年の正月、ウラン・コシユの地で一万の兵力で、チ

ヨクトウ・タイジの三万の大軍を破った。その結果、翌一六三八年から三九年にかけて、グシ汗所属のホシュート部族民が青海に移住した。グシ汗はバートルにホンタイジの称号と多くの贈物、およびその一女を妃として与えて帰国させたが、そののちも黄教の護教者を自任した彼自身はさらに征服を進め、チベット全土を平定してダライ・ラマに献じ、一六四二年、六十一歳のとき、チベット王に封じられ、一六五四年に死んだ。バートルがグシ汗の青海遠征に加わったことは、のちに康熙十七年(一六七八)に、青海征伐を企てながら途中で引き返したガルダン(噶爾丹)が靖逆將軍張勇に書を送って、『その祖の多克辛諾顔がグシ汗とともに青海を取ったのに、ホシュート族だけがここに拠っているのは不都合だから、往つて分け前を求めようと考えているが、貴將軍の管轄地だから、断念した』と詭称したという『要略』巻之九の記事からこれを確かめることができる。多克辛諾顔 Doksin-noyan はカラクラの称号であるが、一六三四年に没したカラクラが一六三六年、グシ汗の青海遠征に加わった可能性はない。バートルには和多和沁 Khodokhoicin (恐ろしい顔つきの人) という異名があった

といわれる^⑥。恐らくドグシンとホドホチンとを混同したのであろう。『青海年代記』によれば、グシ汗は一五八二年の生まれで、十三歳のとき(一五九四年)、Mgo-dkar Ho-
gou (白帽回子の国) すなわち回部に出征して四万の敵軍を破って勇名を馳せ、二十五歳(一六〇六)のときには、ハルハと四オイラットの紛争を調停してハルハの汗から大グシ汗の称号と印璽を授けられ、武勇と慧智でさらに名を顕わしたと伝えている^⑦。黄教擁護の立場からグシ汗をとくに顕賞している『青海年代史』に潤色が多いことは否定できない。ただ、父カラクラの死後、バートルがホンタイジと称したことは事実であるが、それはあるいはグシ汗から授けられたものであったのかも知れない。その理由は次に述べる。矢野博士は四オイラットの首長のうちでロシア人からホンタイジ(コンタインシャ)と呼ばれたのはバートルだけだったように説いておられる。しかし、ロシア側の史料にも清朝側の史料にもなくとも、バイバガスが四オイラットの汗だったことは、さきにもみたとおり、『ウバシ・ホンタイジ伝』に誌されている。のちにもふれるように、バイバガス以下のアハイの五子が、「五虎」とよばれて特に有名な

のも、ホシュート部の強盛を物語るものではないか。一六四〇年にバイバガスが死ぬと、その子のオチルトツ Ochirtu (鄂齊爾圖) が汗位をついだ。デュ・ハルドは今から八〇年ばかり前(一七世紀の中ごろ)、四オイラット(厄魯特)のうちでもっとも有力だったのはオチルトツ・ツェツェン・ハン Ochirtu Tsetse (≡ Setseu) Gan (鄂齊爾圖車臣汗)であったといっている。また清朝の記録にも、順治四年(一六四七)以後、オチルトツ汗の入貢したことがみえている。青海に限らず、オイラットの本拠でも、バートツルの権威がひとり高かったわけではない。実力においてはともかくも、チンギス汗家の血統をひくホシュート部長は四オイラットの汗として、オチルトツにいたるまでその権威を保っていたのであろう。グシ汗のひきいるホシュート部の青海移住は確かにハルハの東モンゴル族と四オイラットの抗争の延長であった。そのうえ、黄教の擁護という大義名分さえ具わっていた。ジュンガル勢力に押され勝ちだったホシュート部の勢力挽回のために、「五虎」の一人であるグシ汗が青海を征服したばかりでなく、チベットの内戦に介入したのは、時勢を見抜いた聡明な行動であっ

たといってよい。彼がいかに先見の明をもっていたかは、青海征服直後の一六三七年(崇徳二)に、オイラット族の諸酋に先んじていち早く当時まだ盛京に都していた清朝へ厄魯特汗と称して遣使入貢した事実がこれを証明している。グシ汗の青海遠征に加わりながら、たちまち本国へ引き上げたバートツルには、またそれなりの理由があったのであろう。ただ、歴史的にみて極めて意義の大きいチベット経営に参画しなかったバートツルには、まだ四オイラット全体を動かすほどの実力はなく、オイラット汗であるバイバガスの権威に従っていたにちがいない。『ザヤ・パンディタ伝』には、バイバガスの死後、オイラットの集会 *cuighan* を主宰した「両タイジ」として、オチルトツとバートツルの二人が併称されているということである。オチルトツはハルハ、オイラットの諸部族長が集まって一六四〇年に制定したいわゆる『オイラット法典』には、伯父のグシ汗、岳父のバートツル・ホンタイジなどとともに集会参加者のうちに名を連ねているが、まだタイジの称号をもっているにすぎず、『ザヤ・パンディタ伝』の記載とも一致する。グシ汗が一六〇六年にハルハの部長から汗号を授けられたと

いふのは伝説で、バイバガス汗の死後は清朝側の記録にみえるように、グシ汗が衛拉特汗、すなわちオイラット汗を称し、グシ汗の死後、オチルトゥッ汗はじめて汗号をついだのではなかったか。そうだとすれば、バートゥルがグシ汗からホンタイジの称号を与えられたというのは事実と認めよからう。

いずれにせよ、以上に述べてきたところに誤がなければ、カラクラのあとをついでバートゥルがホンタイジと称した一六三五年(?)をジュンガル汗国の成立の年とみるズラートキンの考え方には無理がある。バートゥルはもとトルグートが拠っていたタルバガタイ地方に幕営をおき、一六四五年ころその東方のホボック・サリ Khobok-sari (和博克薩里) にラマ教寺院を中心とした都市を経営する一方、しぎりにカザーフ族を伐ち、回部を掠めるなど、ジュンガル勢力の強化につとめた。バートゥルの死(一六五三、六〇、六五など諸説がある)後、父のあとをついだセンゲ Sengge (僧格) は遺産相続をめぐって兄弟たちと争った。当時、ホシュート部でも、イリ川上流に拠ったオチルトゥッ汗とイリティッシュ川上流に遊牧していたその弟のアブライ・ノヤ

ン Abrai-noyan (阿巴頼諾顔) とが争い、オチルトゥッ汗と結んで戦ったセンゲが最初は勝利をえた。しかし、一六七〇年、結局暗殺されてしまった。このとき、ラマとしてラサで修業中だったセンゲの同母弟のガルダン Galdan (噶爾丹) はオチルトゥッ汗の授けをえてその仇を報じ、残敵を青海に走らせ、一六七二年、ジュンガル部の支配権をにぎりホンタイジと称し、兄の妻だったオチルトゥッ汗の孫女を娶ったが、やがて刃をオチルトゥッ汗とその与党に向け、かれらを捕え殺した。^⑩ ロシア使節の報告によると、ガルダンの襲位当時、オチルトゥッ汗はザイサン・ノール Zaisan 湖付近にいた。ガルダンと抗争五年ののち、彼はサイラム・ノール Saran-nor に道を取り、タルキ山 Talki-ola (塔勒奇鄂拉) を越えてイリ谷地のガルダンを奇襲しようとしたが、先手を打ったガルダンはタルキ峠にオチルトゥッ汗を破り、追撃してサイラム・ノール付近でこれを捕え殺した。^⑪ 清朝側の記録によれば、それは一六七七年のことだったらしい。最後までガルダンに敵対していた一族の諸酋もほぼ同時に抹殺された。ここにいたって、少なくともアルタイ・天山間のオイラットの本地では、ガルダンの勢力が確

立し、ジュンガル王国の成立をみた。ついで一六七九年には、ダライ・ラマから授けられたといつて、ボショクトゥ・ハン(博碩克凶汗)と号して清朝に入貢したといわれる。従つて、この年を以てジュンガル汗国が成立したといえ、いえないこともない。

はじめ、その大ウルス *ulus* (部民) をひきいてイリ川の上流に遊牧していたと伝えられるオチルトゥ汗が北方のザイサン・ノール湖付近に移つたのが事実とすれば、その時期はセンゲ支配時代の内乱期に求めざるをえない。古くチャガタイ汗がオルダを設けた景勝の地イリ川の河谷をホシュート部から奪つたことは、ジュンガル部にとつて覇権の確立であつた。この地方がジンガル王国の根本の重地として、その滅亡におよんだことは、更めて説くまでもなからう。

- ① 若松「カラクラの生涯」二〇二五頁。
- ② 岡田「ウバシ・ホントイジ伝」一五頁。
- ③ 若松「カラクラの生涯」一九二〇頁。
- ④ 若松「オイラート族の発展」八四頁。
- ⑤ Ho-chin Yang, *The Annals of Kokonor*, The Hague, 1969, pp. 34-41, 山口「願楽汗チムント支配の歴史」七四一―七七三頁、特に七四六―七五二頁。

- ⑥ P. Pelliot, *op. cit.*, p. 20, pp. 22-23.
- ⑦ Ho-chin Yang, *op. cit.*, pp. 34-35, 山口前掲論文 七四八頁。
- ⑧ 若松「オイラート族の発展」八五頁。
- ⑨ リヤゾノフスキー『蒙古慣習法の研究』五六頁。
- ⑩ 拙稿「ガルドン伝雑考」『石浜先生古稀記念東洋学論叢』一九五八、四六九頁、註③。
- ⑪ 四オイラットの住地について、『藩部要略』卷之九では、「初皆衆牧天山之北。阿爾台山之南。」というだけであるが、魏源の『聖武記』卷三、康熙親征準噶爾記には、初厄魯特四衛拉部。曰綽羅斯。牧伊犁。曰都爾伯特。牧額爾齊斯。曰土爾扈特。牧雅爾(即塔爾巴台)。曰和碩特。牧烏魯木齊。」としている。時代によつて牧地に変化があつたことはもちろんで、魏源の示す四部の配置も何時のものかわからない。ただ、『ザヤ・パンディタ伝』によれば、デルベツト部のキョンドロン・ウバン Kondrong-abasi のウルスはイルティッシュ川の下流で、アブライ Abai のウルスはその上流で、僧院の方に向つて遊牧し、オチルトウ・チエチェン汗はその大ウルスをひきいてイリ川上流で遊牧したらしい(ウラヂーミルツォフ『蒙古社会制度史』、一九三六、三八五―八六頁)本文に「デルベツト部」とあるのは、明かにホシュート部の間違いである。「僧院」はセミバラチンスクに近く、アブライが建てた有名な Abai-Kit にちがいない。
- ⑫ 拙稿「ガルドン伝考証」『東方学会創立十五周年記念東方学論集』一九六二、二二―三三四頁。
- ⑬ 拙稿「西套厄魯特的起源」六五八頁。

四

最近の内外学者の研究成果をふまえて、ジュンガル王国勃興の跡を辿れば、おおよそ以上のようなになると思う。ただ、飛躍的な知識の増大にも拘らず、現在なお十分に明かにされていない大きな問題の一つは、エルート(厄魯特、額魯特、厄得忒) *Ölüt* \wedge *Ogelet* 西人の *Eleuth*, *El-out* の族称に関するそれである。もう少し詳しくいえば、清朝では、西モンゴル族はオイラットよりもむしろ伝説的な東モンゴル族の祖 *ドー・ソホル* *Doa-sohkor* (多幹索和爾) の四子の子孫と伝えられる四オイラット(厄魯特・巴噶圖特・和特・奇喇古特)の一つとしてのエルートの名で知られ、四オイラット(衛拉特)の代りに四エルート(厄魯特)の族称さえ使われている有様である。そうだとすれば、エルートとは本来どの部族であるか。またそれがどうして四オイラットの全体を指すようになったのか。これについては、かつて「厄魯特考」で、エルート \equiv ホシニート説とエルート \equiv ジュンガル(チヨロス)説とを紹介し、これらを検討した結果として、前説に賛成したいが、

さりとて誤りとして後説を無下に退けるわけにもいかない事情を述べておいた。しかし現在ではより積極的に前説を主張できると信じる。その理由を述べれば、次のとおりである。

一、『アルタン・トブチ』に西モンゴル族の諸部族を列挙したうちに、*Öirat*, *Ölüt*, *Baghatut*, *Goit* の四部の名称がみえていることである。^①本来オイラット族であることが明かなジュンガル(チヨロス)部がエルートであるはずはない。もっとも、エセンの父のトガン・タイジ *Toghan-taiji* (托歡太師)のころの部族名として示されている右の四部の族称が果して歴史的事実^②に則しているかどうかは疑問である。伝説は別として、エルートの存在が確認できるのは、すでにみたとおり(参照四三頁)一五八〇年代のハルハのアバダイ汗のオイラット征伐以来のことにはすぎない。

二、このアバダイ汗がコブコル・ケリエで撃破したエルート *Ogeled* がハナイ・ノヤン・ホンゴルのひきいるホシニート部にはかならなかったことは、モンゴル史料に依って岡田氏が証明したとおりである。これはエルート \equiv ホシニート説にもっとも確実な論拠を提供するものといつてよい。

三、清朝におけるエルート（厄魯特）という族称の用法も、これを裏付けるように思われる。のちにはともかくも、康熙朝では西モンゴル族、とくに青海のホシユート部を専ら厄魯特とよび、ジュンガル（準噶爾）——というよりもガルダンの支配下にあったアルタイ・天山間のオイラット諸部族——はこれを北厄魯特と称した事実が注意される。一六三七年（崇徳二）に、はじめてみずから厄魯特汗と称していち早く清朝へ遣使入貢したのが青海のホシユート部長グシ汗だったことはすでにみたとおりである。

四、エルート＝ジュンガル説の根底には、西モンゴル族オイラットのうちでは、最初からジュンガル部がもっとも有力だったという考え方が支配的である。ところが、カラクラ、バートウル時代のジンガル部と対抗する勢力としてバイバガス、オチルトウ父子のホシユート部が存在したことはズラートキンも認めているところである。しかも、筆者の考えに誤まりがなければ、オイラット汗の地位はバイバガスからグシ汗をへてオチルトゥに伝わったはずで、最高の権威をもつホシユート部の異称であるエルートが四オイラット全体を現わした可能性は大きい。かりに、ズラ

トキン氏に従って、カラクラ・バートウルの時代にジュンガル部の勢力が伸張し、ホシユート部のバイバガスやオチルトゥのそれを凌ぐ状態になったことを認めるにしても、それ以前、すなわちハナイ・ノヤン・ホンゴルの支配期からバイバガスの支配期へかけて、恐らくホシユート部がもっとも強力だったことを想定せざるをえない。しかも、歴史的事実としてはじめて記録に現われるエルートがハナイのホシユート部にほかならないことはさきに見たとおりである。

エルート＝ホシユート説の論証は以上で十分かと思われるが、歴史的背景との関連において解釈したエルートの語源は、なぜホシユート部がエルートとよばれたかを明らかにするに役立つであろう。

エルート *Ogelat* √ *Olat* ということばはモンゴル語で「同母異父兄弟」を意味する *Ogelen* の複数型にちがいないが、それがどうしてホシユートの異称に使われたのか。

バイバガス、オチルトゥなどのハナイの五子が「五虎」 *tabun bar* とよばれたことは諸書にもみえていて有名な事実であるが、『ウバシ・ホンタイジ伝』では「アハイの五

虎」*Akhai-yin tabun bar* といっている。ハナイの妻アハイ可敦所出の五虎の意味である。ところが、『シャラ・トウジ』*Saratji* には、「四オイラットはドア・ソホルの子孫である。いま六姓ある」といい、デルベット、チヨロス、ホイット、バートウット、ケレイト(＝トルグート)の諸部族と並べてユジエツト *Ujyed* 姓を挙げ、「ナグル・ユイシェン *Naghur-Ujjen* は父ヤダイ *Yadai*、母アハイ・ハットン *Akhayi-Khatum*。ヤダイの死後、ガハイから生まれたバイバガスとの二人がいる。ユジエツト姓である」とみえている。ヤダイは『欽定西域同文志』卷十、『欽定西域図志』卷四十七などの世系に和碩特部第十一世としてみえる雅代青三、ガハイは同じく第十一世のハナイ(哈奈諾顏洪郭爾)に相違なく、ナグル・ユイシェンはこれに当るものを見出せないが、その母アハイは夫のヤダイの死後、その従弟のハナイに再嫁して、バイバガス以下のいわゆる「五虎」を生んだと解される。バイバガス等をとくに「アハイの」と称した理由はこれによって判然とするが、それはまたエルートの語源を示しているように思われる。というのは、ホシュトの二大分支であるヤダイの諸子とハナイ

の五子とは正に「同母異父兄弟」にほかならないからである。ユジエツトの族称は他にはみ当たらないが、ホシュトに相当することは疑いない。カルムック語で *qelq* は「同世代」を意味するから、或はユジエツトはその変形かも知れない。しかし、*qelq* の訛音とみる方が正しいのではないか。『青海年代記』⁷⁾では「五虎」を「五人の才能があり、勇敢で英雄的な虎」に比すべき人物と説明している。彼らを中心に、「異父同母兄弟」であるホシュト部の首長たちが相結んで勢力をふるった結果、エルートの名が四オイラットの全体におよんだものと想像される。清朝でエルートと四オイラットを混同したのも理由のないことではなかった。ガルダンとの抗争が始まった康熙朝以後、清朝ではその時々之内付した西モンゴル族の集団を旗に編成し、東モンゴル族の諸部に付牧させた。そのうちには、デルベット旗、ホシュト旗、ホイット旗などと族称のはっきりしたもののほかに、単にエルート旗と呼んでいるものがある。賽音諾顏部に付牧した額魯特部二旗⁸⁾などは代表的な例であるが、その系統を調べてみると、いずれもジュンガル部の首長たちの部落である。この事実はエルート＝ホシュ

ート説と矛盾するようにみえる。しかし、それは清朝で、はじめ康熙朝にはジュンガルの称がほとんど用いられなかったために、また乾隆帝がジュンガル王国を滅ぼしてしまつた一七五九年以後は、ジュンガル部そのものが消滅してしまつたために、歴史的なエルートの族称でかえつてジュンガル(チヨロス)部の子孫を呼んだのであろう。一八世紀の中ごろ以後に書かれたミューラーやペルラスの書に四オイラットのひとつとして挙げられているエルートにしても、事情は同じだと思われる。

後世の記録はともかくも、同時代史料である一六七七—七八年のガルダン・ホンタイジの勅令に、明かにジュンガル部を中心とする、オイラット諸部をエルートと呼んでいるのは、エルート=ジュンガル説の証拠とも受取れよう。

しかし、オチルトツ汗を襲殺して名実ともに四オイラットの首となつたガルダンが当時ほとんど四オイラットの同義語として一般に行なわれていたエルートの称を使つたとしても、決して不思議ではない。ガルダンが自己の直属の部落をジュンガルと呼んで、エルートと区別していたことは、『親征平定朔漠方略』巻四十三、康熙三十六年(一六九七)

四月甲戌の条に、アルタイ山中で窮死したガルダンの死因について述べたハミの使者のこゝばを引いて

逃人杜拉兒称。噶爾丹曾云。我向以折滾噶爾為良善之國。不意無信如此。怨恨數日。飲食俱廢。於十二日頭痛。召丹濟拉前去。十三日午前身死。

とあるのによつても、これを知ることができる。折滾噶爾はジュンガルの滿州語形の音訳で、その「信なし」と数日も怨んだというのは、康熙帝と戦つて敗れたガルダンが根拠地に引上げようとしたのに、兄センゲの子でイリに拠つて自立していたツェワン・アラブタン(策妄阿拉布坦)が清朝に通じ、ガルダンの帰國を實力でも阻止する態度を取つたことを意味している。

ジュンガル王国勃興史に関しては、現在でもなお解明されていない問題が少なくないが、差当り本論文では、ジュンガル王国の勃興を側面から窺う手段として、エルートの族称の来歴を詮索するに止めた。

① C. R. Bawden, *The Mongol Chronicle, Altan Tobci*, Weshaden, 1955, p. 161, note 5; P. Pelliot, *op. cit.*, pp. 6-7.

② 『嘉慶一統志』卷五四五、阿拉善厄魯特の条の套葬の注に厄魯特。本元裔阿魯台。後声訛為厄魯特。共四部。一曰杜爾伯特。一曰青海。

一曰北厄魯特。北厄魯特又別自為四部。即噶爾丹先。一曰套彝。四部各有部長、並屬顯奕汗。称西北強國
とみえているが、この北厄魯特の説明は『朔漢方略』卷一、康熙十六年六月丁未の条に

噶爾丹之父曰和爹親。自号巴圖爾台吉。駐牧北方阿爾台之地。是之謂北厄魯特。

とあるのにもとづいてはちがいがいらない。ハリオは北厄魯特に Kho-lin-gelet のモンゴル語名を当てているが、その理由は判らない。

Pelliot, *op. cit.*, p. 21.

- ③ 矢野博士『近代支那史』六六一―六七頁、P. Pelliot, *op. cit.*
④ A. de Smedt et A. Mostaert, *Le dialecte mongol par les*

*追記 本文では、ユジエットの族称は他にみ当たらないと記したが、それは検索の不足であって、実は『蒙古源流』巻五にみえている。便宜上、江夷氏の訳本に拠って問題を引用すると、

〔エセンは〕それよりダイトウウツの地方に行兵し、ダイミンダ・ジンダタイ・ハンを搦へて、夢の兆にあへりとして、アリマ・チェンダシャングにゆだね、ニンダグン・ミンダガン・ウジエトの高きドウラガン地方に於て保護せよ、とこれを留置せしめ(九八頁)とある。ダイトウウツは大同、ダイミンダ、ジンダタイ・ハンは大清正統帝(英宗)、ニンダグン・ミンダガン・ウジエトは Jirghghan-mingghan Utiyed の満州語形で、「六千ユジエット」の意味である。アリマ・チェンダシャング(阿魯瑪丞相)は東モンゴル族に属するアソット Asot の部長で早くからエセンと対立し、一四三四年、これと戦って敗死したアルクタイ Aruqtai (阿魯台太師)の子で、父の死後は、エセンに従っていたものらしい。『蒙古源流』では、誤まってエセンの死後、アリマ丞相が、英宗をダイドウ Daidu (岱都、大都)すなわち北京に送り返したとし、このとき、明の朝廷から六千ユジエットに多くの賜物があったように誌している(江氏訳本一〇八頁)これらの記事に依れば、ユジエットはアソットの属部であり、少なくとも東モンゴル族の一部だったように考えられる。『アルタン・トブチ』にも、右に引用した記事に似た叙述があるが、難解で意味がよく判らなく(cf. Bawden, *Altan Tobchi*, pp. 173-174)。ただアリマ丞相に当る人物としてやはり東モンゴル族系のユンニェフ Yungnyevu のエセン・サイイ Esen Samai の名がみえるのが注目される。ポーデン氏が六千ユジエットを満州族の兀者に比定したり、tayju を称号と解釈しているのは誤りであろう(cf. pp. 155-156 notes 3, 4)。もっとも、その本文に、永楽帝がホンギラット Ongirad 出身のモンゴル婦人の所出であるという中国の俗説を載せ、ユジエットを帝の親属の部落としているのに依ると、ユジエットはチンギス汗のボルチギン氏族と代々姻戚関係にあったといわれるホンギラット氏(?)族の血統を引くようにも思われる。ホジエットの姓がウジエットだったことはほぼ認めて差支えなく、ジュチ・ハサルの裔ではなくても、東モンゴル族系だったことだけははや疑いようがない。いずれにせよ、ユジエットをウゲレット Ugelet の訛音とみる説は撤回しなければならぬ。

(京都大学教授、)

Mongols du Kansou occidental, III^e partie, Pei-pin, 1933, p. 469.
⑤ P. Pelliot, *op. cit.*, p. 78, note 176; H. Howorth, *History of the Mongols*, Part I, p. 501

⑥ Кларк Туджунъ Монгольская летопись XVII Вѣка, свободнай метри, перевод, и сведение и приписания Н. П. Шацины. Текст стр 261-262, перевод стр 168-169

⑦ Ho-chin Yang, *op. cit.*, p. 34.

⑧ 張穆『蒙古源流』卷三八

⑨ P. Pelliot, *op. cit.*, p. 6-7.

⑩ リヤザノフスキー、前掲書五三頁、田山茂『蒙古法典の研究』一九六七、一〇八頁。

Uragami Norimune : A Protégé of the Akamatsus

By Kyoichiro Mizuno

From the Revolt of Kakitsu (1441) up to the Wars of Ohnin and Bunmei the governance of the *shugo* families in their territories came gradually into the hands of the stewards who were originally the clients of those magnates. Though audacious their activities came to be, they could not appeal to their own power independent of the government of the Muromachi *Bakufu* with its network of *shugo* families. True, the *shugos* were declining, but their authorities were recognized as such. It is why those stewardial classes still moved in the orbit of the established order, but at the same time they were in the far more advantageous status to get in contact with the medium-sized and smaller lords who were growing in power in the remotest and robust countrysides. In short, the stewards of those *shugos* placed themselves in the midway of the social ladder of the time with the result of the accumulation of power in any way and other.

This is to clarify one of those stewards or a protégé in the person of Norimune of the Uragami family who were in the back of *shugo* Akamatsus who were in turn playing a conspicuous role in the political world before and after the Ohnin-Bunmei era.

De nouveau sur les Eleuthes

Par. Akira Haneda

Les Mongols occidentaux déroulèrent, de la première moitié du 17^e siècle au milieu du siècle suivant, une activité intense comme Mongols, ou plutôt la dernière comme nomades. On qualifie communément leur Etat du "Royaume des Djoungar". Cependant, les Djoungar ne formaient pas dès le début la tribu dominante des Mongols occidentaux, qu'on continuait à appeler "quatre Oirat" d'après l'usage. A mon avis, il devait y avoir une période, pendant laquelle les Khošūt étaient prédominantes. Les Khošūt appartenaient aux "quatre Oirat", quoique leur chef prétendit, paraît-il, descendre du frère cadet de Gengis-khán. Les

Eleuthes (<Ölöt) des Tsing, qu'on prenait pour synonyme des " quatre Oirat ", semblent être le surnom des Khošüt, ou plus exactement celui de la famille princière de cette tribu à son apogée. Le " Royaume des Eleuthes " devait précéder donc le " Royaume des Djourghar ".

Discourse on Traffic by Lewes Roberts
and the Navigation Act

By Minoru Asada

The age between the economic depression in 1620's and the Puritan Revolution was a harsh time even for the London merchants, the *elite* class of business circles in England. In this environment Lewes Roberts, on whom I will now discuss, was a trade merchant who could design a plan to find the way out of the depression by advocating the Dutch type entrepôt trade. Though some researches have been made on Roberts, I am afraid that he has been regarded as a so-called semi-feudal merchant or an adherent mercantilist on the ground that he was an advocator of entrepôt trade.

However, when we consider the situation of the English trade in the international arena in that period, or when we further consider it in the context of the Navigation Act of Cromwell, we find that it destined the way of the commercial expansion and the economic growth of England. Therefore we feel it necessary to make a reconsideration on his discourse.

In this article I shall investigate Roberts' discourse on traffic in connection with some data that suggest the formation of the Navigation Act.

The " Charter of 1804 "

—The colonial policy after the fall of
the Dutch East India Company—

By Y. Tabuchi

After the fall of the Dutch East India Company, there were two trends concerning how to govern the territories, one of which was the " indirect